



浮世絵の摺りを匠な手技で再現

平成22年11月13日(土)・14日(日)

講師:伊藤達也さん

(浮世絵木版画彫摺技術保存協会員)

場所:企画展示室前ロビー

参加者:334人

「北斎漫画展」に合わせて、葛飾北斎の「富嶽三十六景」の摺りを実演していただきました。摺りを重ねて、画面が変化していく度に歓声が。熟練した伝統の職人技に熱い視線が集まりました。

「風土記の空 第3回郡山市内の中学校美術部・選択美術による作品展」

前期:平成22年11月23日(火)~12月5日(日)

参加校:明健中、逢瀬中、守山中、高瀬中、緑ヶ丘中

後期:12月14日(火)~12月26日(日)

参加校:郡山第一中、郡山第四中、郡山第五中、
富田中、宮城中

中学生が制作した作品を、生徒自ら展示しました。
若い感性が大きく発揮された展示となりました。



体験!演出写真

平成23年3月6日(日)

講師:瀬尾浩司さん(写真家)、

松崎理さん(アートディレクター)

場所:多目的スタジオ

参加者:20名

「植田正治写真展」に合わせて、ミニ砂丘スタジオを舞台に受講者の皆さんが作品の一部となった面白い作品を作りました。



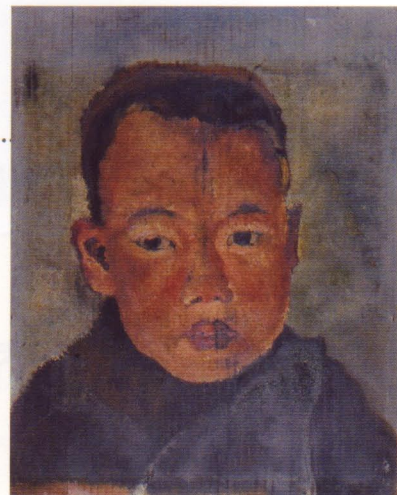
修復作品報告《徳坊》 平成19年度に当館の収蔵品となり、修復を経て綺麗になった徳ちゃんです。

草土社という画会の会計係を務め、作品も同展に出品し続けました。《徳坊》は、1918(大正7)年12月の第6回草土社展に「非売」として出品され、同展出品目録に図版が掲載されています。ちょうど劉生のモデルになった年に描かれたものということになります。川幡が草土社に出品していた頃の作品はこれまでほとんど知られていませんでしたので、研究者の間でも「謎」とされていた画家でした。それが、別の画家の調査をしている間に偶然この作品が発見され、当館に寄贈された次第です。

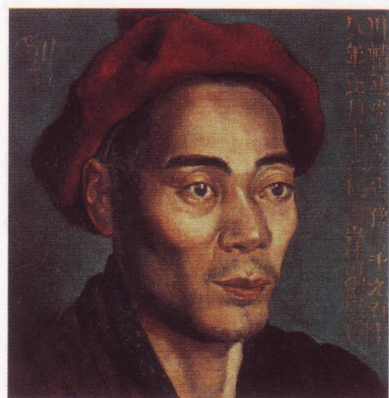
当時の目録に図版が掲載されていたことから、この作品の評判が非常に良かったことがうかがえます。特に、同じ草土社の仲間である木村荘八は、「大正七年作の『徳坊』と云ふ様ものだと、此の人独特の飄逸な愛情が何所か筆端に覗くので面白い」(『みづゑ』第234号、大正13年8月、春鳥会)と後に書いています。モデルの特定はできませんが、小さいサイズながらもムスツとした徳ちゃんの表情はどこか滑稽です。そこがこの作品の魅力になっており、性格は温厚で誰からも信頼される人物だったといわれる川幡の人柄を感じさせる佳作です。

当館では、岸田劉生、木村荘八、河野通勢、中川一政、横堀角次郎といった、草土社の画家たちの作品を収蔵していますが、この作品によってより一層その充実を図ることができました。

(菅野 洋人)



川幡正光《徳坊》
1918(大正7)年 油彩・板 22.4×18.2cm 加藤富士子氏 寄贈



岸田劉生《川端正光氏之肖像》
東京国立近代美術館所蔵
(「没後50年記念岸田劉生展力タログ」(1979年)より転載)

川幡正光(鹿児島生まれ 1890~1973)は画家としてはあまり知られていませんが、大正時代を代表する洋画家岸田劉生の代表作のひとつ、「川幡正光氏之肖像」(1918年作 東京国立近代美術館蔵)のモデルとしてその顔はよく知られています。そもそも、原宿で写生をしていたところ、偶然劉生と知り合って意気投合したことからふたりの交遊は始まりました。以来、川幡は劉生が中心になって始めた